

デンソーグループ

東日本大震災

復興支援10年史

未来へ遺す、ドキュメンタリー





デンソーグループの技術と、人間力と。

日本を揺るがした、未曾有の大災害。

私たちは、何ができるのか、

デンソーグループの一員として、ひとりの人間として。

自動車業界をも窮地に立たされるなかで、

いち早く、動いた。

あれから、10年。

街は日常を取り戻し、

人々はすっかり前を向いて歩んでいる。

しかし、寄り添い続けた私たちは、知っている。

震災はまだ、終わっていない。

失われた暮らしは、もう戻ってこない。

だから、私たちも忘れてはならない。

心を揺さぶられた出来事を、この目で確かめた光景を、

ここに刻むのだ。未来への礎として。



## CONTENTS

年表で振り返る 支援活動	3	フラガール	21
被災地と自動車産業のために 初動支援	7	東北応援ツアー	23
社員の総力を結集 人的支援	11	ハートフルまつり／かりや3.11を忘れない	24
長期的に絆を育む 10年支援		はあとふる基金	25
冷凍コンテナ	15	貴重な体験を、明日への戒めとして	26
自転車寄贈／フォークリフト寄贈	17	震災が繋いでくれたご縁 絆マップ	27
高砂仮設住宅との縁／スポーツでの支援	18	加藤宣明前社長特別寄稿 東日本大震災を振り返って	29
ベルマーク寄贈活動	19	編集後記	30

## 東日本復興支援の取り組み10年史に寄せて

仲間達に、次世代に継承し続けていくべき10年史。

ここに出てくる仲間達は皆、社是にある「信用を尊び責任を重んず」、「虚飾を廃し和衷協力 誠実に當る」、「最善の品質とサービスを以って社会に奉仕す」の体現者であり、デンソーグループはもちろん、日本の宝。自分ではなく、他人の困りごとのために当たり前のように必死になれる人達のストーリーが詰まったこの10年史を読み、あなたは何を感じ、どんなことに気づき、どんな行動をしますか？

株式会社デンソー 取締役社長 有馬浩二



# 《年表で振り返る》 支援活動

ひとりの人間として被災地に寄り添い、時にデンソーの技術で復興を支援する。10年間、多くの人の協力を得ながら、東日本大震災と向き合ってきた。

## 手伝う・寄り添う支援

### 東日本大震災発生

災害対策本部設置

避難者受入検討の為、総務部・施設部がデンソー東日本(現デンソー福島)入り

加藤社長(当時)から全社員へのメッセージ

「会社としても最大限の支援を実施」

加藤前社長から災害対策本部の強化・復興支援最優先の指示

加藤前社長現地(宮城県)視察

加藤前社長からのメッセージ

「震災からの復興を会社の最優先課題とする」

人的支援派遣計画決定

3/11 3/13 3/14 3/23 3/31 4/1 4/6 4/17 4/25 5/25

人的支援第1陣【30名】派遣

人的支援第2陣【56名】派遣

人的支援第3陣【51名】派遣

人的支援第4陣【60名】派遣

人的支援第5陣【41名】派遣

夏季輪番カレンダー導入決定

人的支援第6陣【17名】派遣

人的支援第7陣【18名】派遣

人的支援第8陣【28名】派遣

人的支援第9陣【42名】派遣

人的支援第10陣【21名】派遣

人的支援第11陣【37名】派遣

人的支援第12陣【51名】派遣

人的支援第13陣【58名】派遣

人的支援第14陣【53名】派遣

人的支援第15陣【47名】派遣

人的支援第16陣【64名】派遣

12/16

人的支援第11陣



人的支援第4陣



人的支援第1陣



震災直後の仙台港



人的支援活動風景



人的支援第一陣出発

## 補う・提供する支援

社内備蓄品搬送開始

デンソー東日本を避難所として開放  
従業員による救援物資収集開始

はあとふる基金から中央共同募金会へ寄付

従業員からの救援物資搬送開始

デンソーグループとして中央共同募金会へ寄付  
従業員からの義援金収集、中央共同募金会へ寄付

従業員からの救援物資搬送開始

デンソー工業学園・WAFCA・刈谷市役所と共同で放置自転車の修理開始

避難される方向けに社宅提供を公表

修理済自転車を刈谷市が搬送

藤倉ゴム工業の代替工場としてデンソー東日本を貸与

デンソーグループハートフルフレンド昼ボラ隊がベルマークで東日本支援を開始

冷凍コンテナを貸与

高校・高専に遊休・余剰工具を寄贈  
飲料水ろ過装置の寄贈  
高校・高専に余剰計測器を寄贈  
高齢者施設に備蓄用電源BOXを寄贈  
はあとふる基金による助成開始  
中小企業に遊休・余剰工具を寄贈  
高齢者施設・高校に蓄電池システムを寄贈  
介護施設等に車載ポータブル電源を寄贈



冷凍コンテナ



ベルマークの収集活動



放置自転車の修理



従業員による救援物資の仕分け



社内備蓄品搬送

はあとふる基金で今後10年間寄付することを決定

社員食堂における寄付付きメニュー(ハートフルメニュー)導入  
仮設住宅・高齢者施設にクレベリンを寄贈





ハートフルまつり 東北ブース



東北との絆 企画展



フラガールによる慰問



かりや3.11を忘れない〜キャンドルナイト〜



社員食堂の岩手フェア



女子陸上長距離部による陸上教室



女子バレーボール部震災復興マッチ



デンソーグループフラガール結成・ハートフルまつり2012

2021 【令和3年】 2020 【令和2年】

2019 【平成31年】 【令和元年】

2018 【平成30年】

2017 【平成29年】

2016 【平成28年】

2015 【平成27年】

2014 【平成26年】

2013 【平成25年】

2012 【平成24年】

手伝う・寄り添う支援

デンソーグループフラガール結成

デンソーグループハートフルまつり 東日本復興支援をテーマに開催  
フラガールキャラバンとして継続を決定  
女子ソフトボール部震災復興マッチ・教室開催(宮城)

第1回 かりや3・11を忘れない〜キャンドルナイト〜を  
NPO 法人まちづくりかりやと共催

東北応援ツアー(宮城・福島 3日間)

デンソー時報特集号発行「あれから2年」  
デンソーグループハートフルまつり 東北ブース出展※以降毎年開催  
女子バレーボール部震災復興マッチ・教室開催(宮城)

スパリゾートハワイアンズによるデンソー表敬訪問  
女子陸上長距離部駅伝応援団体への訪問・交流(宮城)

第2回 かりや3・11を忘れない〜キャンドルナイト〜

フラガールキャラバンアースデイいわき in モリコロパーク

東北応援ツアー(宮城・福島 3日間)

フラガールキャラバン 東北応援フラチャリティーイベント  
社員食堂で岩手フェア開催 ※以降毎年開催  
社員食堂で福島フェア開催 ※以降毎年開催



東北応援フラチャリティーイベント

第3回 かりや3・11を忘れない〜キャンドルナイト〜

フラガールキャラバン 江南市東日本復興支援イベント

東北応援ツアー(福島 2日間)

第4回 かりや3・11を忘れない〜キャンドルナイト〜

フラガールキャラバン 江南市東日本復興支援コンサート

東北応援ツアー(福島 3日間)

フラガールキャラバン 老人ホーム施設ふるさとの楽園慰問(福島)  
フラガールキャラバン 名古屋栄東北屋台村

第5回 かりや3・11を忘れない〜キャンドルナイト〜

東北応援ツアー(福島 2日間)

東北応援ツアー(岩手 3日間)



東北応援ツアー

第6回 かりや3・11を忘れない〜キャンドルナイト〜

東北応援ツアー(福島 2日間)

フラガールキャラバン ココロハコプロジェクト「ふくしまフェスタ」@MEGAWEB(東京)  
「いわて・みやぎ・ふくしまフェスタ」@MEGAWEB(東京)

東日本復興支援「東北との絆〜東日本大震災から8年〜」企画展開催  
フラガールキャラバン かりや3・11を忘れないプレイイベント

第7回 かりや3・11を忘れない〜キャンドルナイト〜

東北応援ツアー(福島 2日間)

フラガールキャラバン 東日本復興支援

「東北との絆」企画展ステージ(デンソー大宮・西尾)

フラガールキャラバン ココロハコプロジェクト  
「いわて・みやぎ・ふくしまフェスタ」@MEGAWEB(東京)

新型コロナウイルス感染症拡大による各種イベントの中止

デンソーグループWebハートフルまつり2020開催

補う・提供する支援

はあとふるポイント交換商品に  
東北のNPO法人の授産製品を導入  
はあとふる基金で宮城県の  
NPO 法人冒険あそび場に車両寄贈

宮城県石巻市立開北小学校に校庭用大時計を寄贈



ベルマークで寄贈された大時計

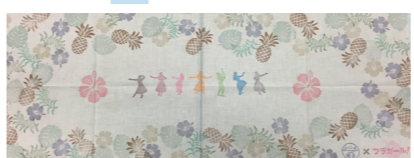
刈谷商工会議所の  
復興支援  
プロジェクトの一環で  
中古フォークリフト寄贈



フォークリフト寄贈出発式

宮城県石巻市立鹿妻小学校に屋外用掲示板を寄贈  
海外衣料回収で集まった衣料の一部を福島県の  
NPO 法人ザ・ビープルへ提供開始

宮城県石巻市立渡波小学校に屋内用カーブミラーを寄贈  
福島県いわき市立藤原小学校にワイヤレスアンテナを寄贈  
福島県のNPO 法人いわきおてんとSUN企業組合と  
フラガールがコラボで手ぬぐいを製作開始



コラボして製作した手ぬぐい

福島県いわき市立長倉小学校に逆上がり補助器等を寄贈

宮城県石巻市立牡鹿中学校に長机を寄贈



募金活動

福島県いわき市立湯本第一小学校にワイヤレスチューナーユニット等を寄贈

宮城県仙台市立高砂小学校にボールカゴ等を寄贈  
岩手県大槌町立大槌学園にプリンター等を寄贈



宮城県仙台市立高砂小学校からのお礼

宮城県気仙沼市立瀨戸小学校に電子ピアノ等を寄贈

福島県いわき市立湯本第三小学校に大型扇風機を寄贈

宮城県仙台市立若林小学校に  
キッズドッジボール・ドッジビーを寄贈



ベルマーク収集、仕分け

福島県いわき市立湯本第二小学校に大型扇風機寄贈

福島県いわき市立植田小学校に一輪車用スタンド寄贈(予定)



# 東日本大震災が起こる

震源は三陸沖、マグニチュードは9.0。  
宮城県北部で震度7、東北・関東の各地で震度6強～5強を観測。



## 《被災地と自動車産業のために》

# 初動支援

「あの日が、悪い夢だったら」

日本人の多くがくちびるを噛んだ、2011年3月11日。  
起きてしまった現実を受け入れるしかない私たちに、行動が問われていた。



これは、間違いなく国家的な危機だと直感した。  
東北や関東にいる社員は？ 一抹の不安がよぎる。

デンソー本社も大きく揺れた  
「震源から遠くてこの揺れなら、震源地付近は相当だろう。これは、ただことではなさそうだ」と心配の声があがった。ただちに、災害対策マニュアルに則って災害対策本部が立ち上がり、本部長である社長が、副社長や専務、機能センターおよび営業グループの役員や部門長を招集。地震発生から、約1時間のことだった。

### 休日返上で情報収集に奔走した

巨大な津波が襲い、甚大な被害を受けている東北の沿岸地域をはじめ、炎上する千葉県のコンビニートや都心にあふれかえる帰宅難民…。そして3月12日(土)には、福島第一原発で事故が発生。災害対策本部長である社長は「とにかく情報収集と被害状況の把握が第一だ」と指示し、各担当は人的・物的被



稼働を目前に控えた福島の新工場を、避難所に。それは、デンソーの歴史に残る英断だった。

### 田村市の市長から直々に要請が

震災が起こったまさにその時、デンソー福島<sup>\*</sup>の新工場は建設工事を終えて、行政による最終検査中だった。幸い、生産設備を設置する前だったこともあり、一部のガラスが割れ、床や壁の一部がひび割れたのみで、大きな損壊は免れていた。

震災翌日の12日(土)、44km東にある福島原子力発電所一号機が水素爆発を起こしたその日の午後、災害対策本部に一本の電話が入った。「福島原子力発電所一号機から半径20kmに住んでいる人を急いで避難させなくてはならない。工場の空いている敷地を、避難する人のために貸してほしい」。当時の田村市長からだった。電話を受けた社員が「上長に確認します」と電話を切ろうとした



害の把握に全力を尽くした。日本国内に勤務する社員はグループを含めると約6万人。関東・東北の拠点や工場に勤務する人や出張に出かけている者もいた。所属部署に協力を仰ぎながら、一人ひとりの無事を確認していった。同時に建屋や設備の確認も進める。電話の不通により難航するなか、デンソーセールス東北支社(現デンソーソリューション東北支社)は被害が大きく立ち入り不可の状況であることが確認された。社員の安全も徐々に明らかになり、幸い全員無事だったものの、自宅を被災したり家族を亡くしてしまったりした社員が少なからずいることがわかった。

### ”想定外”ばかりの難局に、力を合わせて立ち向かう。

#### 自動車部品メーカーの責務

同時に、最優先で対応したのが、お客様への製品の供給責任だ。デンソーの拠点はもとより、部品材料メーカーが被災したこと、部品の製造に必要な材料も揃わなくなってしまうのだ。部品が供給できなければ、自動車メーカーの生産ラインを止めてしまうことになる。それを避けるために、各セクションは在庫の確認や代替品の検討、自動車メーカーへの報告に追われた。災害対策本部では、日々届く進捗状況を壁一面に貼り出し、メンバー全員で情報を共有しながら対策を進めた。

このとき、自動車産業全体が部品の供給難

時、偶然通りかかった土屋専務(当時)が電話をかわり、「敷地ではなく、建物も貸します」と、即答したのだ。デンソー福島はまだ建物の検査中で、正式には引き渡し前である。「後から関係各所とは調整するから」と、異例すぎる即断即決だった。

避難する方々に、少しでも休息してもらいたい。想像して、工夫を重ね、工場に手を加えていく。

決断から約42時間後に受け入れ  
避難所の準備をすべく、デンソーの総務部と施設部、グループ会社のデンソーファシリティーズとデンソーユニティサービスから、12名の救援隊を結成し、第一陣が防災備蓄品を車に積み、その日の夜、現地へ出発した。

### 約5400㎡の工場部分には健康な人を、約310㎡の食堂と休憩室には要介護者を割り振り、会議室には市の連絡本部と医務室を設置することにした。ガランと広い工場を、とにかく寝泊まりできる状態にしなければならぬ。外は雪がちらつくほどの厳しい寒さ。工場の暖房設備は生活用につくられていないため24時間フル稼働しても13度〜15度くらいにしかならない。そこで、応急措置として発泡スチロールの断熱材を1000㎡分の床に敷き、不足分はダンボールで間に合わせることに。また、放射能の影

に悩まされており、自動車メーカーの大幅な減産が発生。製造現場では多くの工場が減産を余儀なくされた。加藤前社長は各製造部の責任者に、「生産現場が非稼働の間も社員のモチベーションが低下しないように、工夫してやってほしい」と要請をした。

### 加藤前社長が指針を発表

3月14日(月)、全社員のもとに通達が届いた。そこにはこう記されていた。「先の見通せないことが多い中、会社としても被災者の方のご無事と一日でも早い現地の復興を願う。最大限の支援を行ってまいります。社員の皆さんにも臨機応変な対応とご協力をよろしくお願いたします」

### 「当時を振り返る」



総務部長(当時) 岩田泰志さん

被災地と上手く連絡がつかず、十分な情報が得られないまま暗中模索。加藤前社長からの指針を受け取ったのは、その最中でした。「会社としても最大限の支援を実施する。通常とは異なる業務をお願いする場面が出てくるので協力してほしい」という言葉に、被災地のために出来ることをためらわずにやろうという思いを強くしました。さらに、要所所での素早い決断を目的の当たりし、デンソーの決断力、判断力の素晴らしさを改めて実感しました。

### 「デンソーの迅速な判断に感服」

響を少しでも抑えようと、壁の隙間は全て塞ぎようとした。

14日(月)の朝9時から次々と避難者に乗せたバスや乗用車が到着。午後3時までに、約2000人の収容が完了した。着の身のままの避難だった。救援隊はしばらく施設管理のために常駐し、被災者と行政の橋渡し役を務めた。寒かったり、水道が止まったり、トイレの水が溢れてしまったりと、不慣れな思いをさせてしまったこともあったが、不満の声はほとんどなく、この難局を一緒に乗り切ってくれた。避難した方々は、4月14日までに田村市が指定した別の施設に順次移動。デンソー福島は、一次避難所としての役割を終えたのだ。

### 「当時を振り返る」



デンソー福島 佐藤巨さん

田村市で家族と暮らしていた自宅は震災で大きく被災しましたが、工事建設の監理を担当していたため、避難所の準備をすべく通常通り出勤。異常が発生したときは、夜中に工場に駆けつけることもありました。藤倉ゴム工業に貸与する前は、夜遅くまで指示書を作成する日々で、「こんな生活がいつまで続くのだろう」と、毎日不安だった記憶があります。それでも最後までやり遂げられたのは、「地域や自動車産業に貢献しているんだ」という思いがあったからです。

※当時の名称はデンソー東日本



# ひとつでも部品が欠けると、自動車は完成しない。 自動車産業の復旧のために、できることを。

## 藤倉ゴム工業(株)に建屋を貸与

いよいよ工場が稼働するという折に、デンソーの仕入先のひとつ、藤倉ゴム工業から「二次的に建屋を貸与してもらえないか」と、要請が入った。福島県南相馬市にある小高工場が避難区域内にあり、工場が稼働できず生産が追いつかないという。藤倉ゴム工業が製造する自動車向け工業ゴムは特殊で、代替できるメーカーがなかったのだ。本来なら、すぐにでもデンソー福島に稼働に向け生産設備の設置を開始したいところだったが、自動車産業への貢献を優先して、4月中旬に貸与を決定した。機械を設置するにあたり、床に穴を開けたり、ボイラーの煙突を実装したりと、工場を大掛かりに改修しなければならなかったが、早急に生産を始めるべく、トヨタ自動車、藤倉ゴム工業、建設会社、行政の協力のもと、通常だと3、4ヶ月かかる工事を約1ヶ月強で完了させた。そして5月16日に、藤倉ゴム工業のゴム練および加硫工程



の生産設備据え付けが開始されたのだ。

## 新工場の稼働が本格スタート

6月下旬にはカーエアコン用生産設備の一部を移設、10月下旬からデンソー福島としての稼働が始まった。この始動を待ちわびていた者たちがいる。それは、デンソー福島設立を機に採用され、西尾製作所で研修を受けていた田村市周辺出身の社員たちだ。稼働が延期になり不安に思うこともあったが、予定より長く研修をし、経験を積み、自信をつけて戻ってきたのだ。

## 「当時」を振り返る



施設部長(当時)  
舟橋正人さん

ピカピカの工場の床や壁を壊して作り直すという辛い気持ちを抱えての行動でした。関わる中には、自身も被災した方も多くいましたが、夜遅くまで働いたり、連休中でも休めない日もありました。もっと配慮ある言葉をかけられればよかったと反省すると同時に、彼らの日本・東北の復興に向けた頑張りを強く感じました。トヨタ自動車の豊田章一郎名誉会長と張会長が現場に足を運んで激励してくださったことで、みな士気がより一層高まったのを覚えています。

## 「関係各所の尽力に感謝」

# 支援を申し出る社員が集まった。 その行動力に、「デンソースピリット」を感じた。

## 震災翌日から支援物資を発送

3月12日、備蓄庫に保管されている物資を、デンソーの関連会社等のある宮城県や福島県、山形県に向けてすぐに発送した。当時は震災直後ゆえに、荷物を被災地に届けることは可能なのか、今、被災地では何が一番必要かすらわからない状態。現地の行政と連携し、各自自治体へ送る手はずを整えた。現地入りした社員から情報をいち早くキャッチし、薬やタオル、食料品に加えて、おむつ、ミルク、トイレトペーパー、生理用品、簡易便器などを集めた。備蓄庫の物資にないものは、総務部の社員が買いに行き、ダンボールに詰めてトラックで発送。そして、翌週明けの14日には、社員に家庭の日用品(余剰品)の提供を募ったのだ。

その数は合計5000箱にも及んだ

工場や拠点ごとに支援物資を集め、本社に届ける。その量は想像を遙かに超えていた。国内の各拠点では、ボランティアが連日、昼休みや就業後の時間を割いて、物資ごとに仕分けた。海外のグループ会社からも支援物資が届き、デンソー・セルス・スウェーデンから寄贈された、65箱分の毛布・ジャケットには、8歳と9歳の女の子から「日本の親愛なる友人」と、日本語のメッセージも同梱されていた。国内外から寄せられた支援物資は、31日に東北へ運ばれた。また、3月22日、23日には募金活動が、その後は、組合で義援金の収集も始まり、さらに多くの社員が支援に参加するようになった。



支援物資を仕分けするボランティアに、本社勤務の社員が多数参加した。



トラックに支援物資を乗せて、宮城県や福島県、山形県へと何度も輸送。



ダンボールに物資名を記して、何が梱包されているかひと目で分かるように。

## 震災直後の支援活動

### 会社義援金

2億円(デンソー・グループ会社)

### 親和会(社員)義援金

約7,200万円(2011年9月末時点)

### 救援物資収集

会社の備蓄品や社員からの寄付も含め約5,000箱



## 「震災からの復興を 会社の最優先課題とする」 この言葉で、

## 社員たちの心が決まった。

## 加藤前社長が東北を視察

3月31日、加藤前社長は被災地視察のため山形空港経由で宮城県を目指した。デンソー・セルス東北支社<sup>※</sup>の社員の案内のもと、被害の大きかった沿岸部やデンソー・セルス東北支社を視察。天井が落ち、柱にひびが入るなど建物の損壊が激しく、寒さの厳しい仮事務所での業務を余儀なくされていた社員たちに、大変な状況のなかでも業務に当たってくれていることへの感謝を伝えたのだ。そして、サービス店へ足を運び、労いの言葉をかけた。現地で見える光景、聞く言葉全てが生々しく、被災地への支援の必要性を改めて実感。翌日の4月1日に、決意のメッセージ(以下)を全社に向けて発信した。

## 社員に向けた加藤前社長メッセージ全文

皆さん、こんにちは。社長の加藤です。改めまして、この度の震災で被災された皆様に、心からお見舞いを申し上げます。

さまざまな被災の状況が報告されている中、当社及びグループ会社の社員の方につきましては、全員の無事が確認されたことにまずは安堵しております。しかし、社員の方の中には、大切なご家族を亡くされた方、今なおご家族の安否の確認がとれていない方もいらっしゃいます。心よりお見舞いを申し上げるとともに、被災されたご家族のご無事を心よりお祈り申し上げます。

私自身、昨日に宮城県を訪れる機会を得ました。被災地の惨状を目の当たりにして、改めて被害の甚大さを認識すると共に、災害に苦しむ被災者の支援は、何としてもやり遂げなければならないと、決意を新たにいたしました。当社は震災の発生以来、社員の皆さんの協力をいただきながら、生活支援物資の提供や義援金の寄付、さらにはデンソー東日本を避難所として提供するなど、被災者の方の救済や、被災地の復興に努めてまいりましたが、今後も、一刻も早い復興に向けて、最大限の努力をしまいたいと思っております。

当社及びグループ会社の工場や設備の状況につきましては、幸いにも大きな被害はないことが判明しました。しかし、自動車メーカーや部品メーカーの中には、大きな被害が出ているところがあり、自動車メーカーの多くの工場が、操業停止あるいは部分操業となっています。このため、当社の各工場も、稼働を部分的にせざるを得ない状況が続いています。

生産部門の方には休業や計画有休等にご協力いただき、ご家族の方にもご心配をおかけしていることと思います。また、管間部門の方には、生産復旧やお客様対応に全力で取り組んでいただいております。この場をお借りしまして、厚くお礼を申し上げます。

さて、今回の震災は、地震・津波による被害に加え、原子力発電所の事故、そして電力供給不足の問題へと波及しております。その影響は日本国内のみならず世界へと拡大しつつあり、まさに国家の危機とも言うべき事態となっています。今、私たちがやるべきことは、被災者の支援、被災地の復興のために力を尽くすと同時に、自動車産業に身を置く者として、産業の早期回復を通じて、日本社会の復興に貢献することです。新聞等で報道されておりますとおり、自動車メーカーの生産が、震災前の水準に回復するにはまだまだ時間がかかるものと思われます。また当社の仕入先の中にも、被災され、復旧に暫く時間がかかる工場がいくつかあります。当社としては、被災された企業や仕入先の復旧を支援し、一日も早く、震災以前の姿を取り戻さなければなりません。

以上のような状況を踏まえ、当面の間は「震災からの復興」を会社の最重要課題として、何事にも優先して取り組んでいくことを方針と致します。

本日は、この方針を踏まえ、皆さんにお願いしたいことを3つ申し上げたいと思います。

まずはじめに、被災された企業や当社仕入先への「復旧支援業務」を、最優先としていただくをお願いいたします。現在、当社の関係する企業や仕入先各社の状況について確認を急いでおり、すでに一部、支援活動を始めておりますが、今後さらに、こうした業務が増えてくるものと思われれます。組織の壁を越え、何事にも優先して、被災地の復旧支援業務に取り組んでいただきたいと思います。

次に、お客様、仕入先を含めた社内外の関係者に、迅速で的確な情報を発信していただきたいと思っております。復旧に関する状況は刻一刻と変化していきます。関係者間で情報の齟齬が出ないよう、現在の状況や復旧の見通しに関する情報を、タイムリーかつ的確に関係者に伝えていただき、課題や問題点の共有を図っていただくことをお願いいたします。

最後に、減産に関してのお願いです。

現在、当社の生産水準は、震災前に比べ5割程度に留まっておりますが、この状況はしばらく続くものと覚悟しなければなりません。すでに、皆さんには休業などのご協力をいただいておりますが、今後は更に、「部門を超えた応援」「全社的な休日振替・計画有休の取得」あるいは「減産期間を活用しての改善活動や職場教育」などのご対応をお願いさせていただくことになります。ご理解とご協力をお願い致します。

何度も申しあげておりますが、今回の震災は、国家レベルの危機であり、先の見通せないことも多くあります。しかし、このような時こそ、社員一人ひとりが当事者意識を持って、「今、何ができるのか」をしっかりと考え、全社一丸となって行動を起こすことが必要です。

総智総力を結集して、ともにこの難局を乗り越えていきましょう。

※後に「デンソーソリューション東北支社」と名称変更



# 《社員の総力を結集》 人的支援

はやる思いと、冷静な計画。

人を派遣することが、被災地の負担や迷惑になってはいけない。  
社員の安全を、万に一つも脅かすものであってはいけない。



被災地で復興支援活動はできないか。  
ひとりの人間として、役に立ちたい。

この日本の危機にできること

加藤前社長の言葉により、全社をあげて被災地に寄り添う決意を固めた社員たち。その上で、震災直後から取り組んできた義援金や支援物資、自社で製造したのや技術の提供、それに加えて長期的に支援することはないだろうか考えた。リソースを絞り込んだ先に導かれたのが、デンソーが誇る「人材」だった。

デンソーとして「人的支援」を

再開の目処がたぬ製造現場は不安に包まれ、働く社員たちは「社会のために、被災地のためにできることはないのだろうか」という、もどかしさを抱えていた。

会社として支援に人材を送り込むという構想は、幹部によってすぐに可決された。そして、ある大胆な提案がなされたのだ。復興支援活動を業務と位置づけ、希望者を募って、会社が組織的に派遣するというものだった。このデンソースピリット（先進、信頼、総智・総力）の本質を突き発想は、「デンソーらしい考え方である」と、社員からも多くの共感を呼び、二百数十名以上の社員が志願。連続的な派遣が可能であると確信した。

社会貢献に精力的に取り組んでいるデンソーだが、これほどまでに大規模な人的支援は初めての経験。いつ、誰が、どのくらいの期間滞在し、何をするのか。どのように安全面の担保をするのか。人事部と総務部が連携し、枠組みをつくっていくことになった。

社員派遣の計画と準備に奔走

当時、被害の大きかった宮城県の沿岸部では、被害が甚大なゆえに、支援の手は必要だがボランティアの受け入れ体制が整わない被災自治体がほとんどだった。ボランティア支援センターを立ち上げる社会福祉協議会は、県内ボランティアの受け入れが中心であった。その中で宮城県石巻市の社会福祉協議会は、県外からの支援を真っ先に受け入れ、ピースボートが現地のニーズを吸い上げ、ボランティアに応じて活動先を割り当てるといった支援体制が早い段階で確立していたため、ここを活動エリアの拠点に決めた。

素早い意思決定の連続

約30名を受け入れてくれる宿を探し、食料の調達方法を考える。同時に、ヘルメットや安全靴、防塵マスクなどの安全を守るための備品や薬類も揃えた。未だ被災地では頻繁に余震が起こっていたため、沿岸部での作業中に万が一津波が襲ってきた場合の対応方法も協議。また、作業中の怪我や体調不良で被災地に迷惑をかけてしまわないよう、ペース配分などを行う管理者を任命。部署の枠組みを超えた、組織が出来上がったのだ。このような構想をまとめて報告したところ、加藤前社長は「社員の安全を第一に。しっかりサポートすること」を条件に、承認。これは、震災発生から一ヶ月も経たない4月6日のこと。異例のスピードで物事が進んでいた。

組織の枠を超えて、協力し合う。  
デンソーが誇る団結の力を、試す時が来た。  
現地に前入りして準備

人的派遣が始まる3日前、サポートメンバーが現地入り。お世話になるホテルへの挨拶や、ボランティアセンターでの作業内容を確認するため。また、現地での食料調達のため、コンビニエンスストアやスーパーマーケットの場所や開店時間などをチェック。ほかに、現地状況や開店時間などを写真に収めて本社へ報告した。

第一陣の出発式を実施

4月17日、午前7時45分、被災地に派遣される30名が、西尾製作所に集合した。彼らは、事前に詳細な「活動のてびき」を読み、ボランティアの心構えや緊急時の対応などをしっかり確認。さらに、破傷風の予防接種を受けて当日に臨んでいる。会議室に集まり、役員や各事業部長の激励を受け、大型バスに乗り込む。役員らが手を振って見送りをしてくれていた。社を代表して被災地支援を務めるという使命感が湧き上がった。



震災の傷跡を実感する瞬間

宿泊地となる仙台市まで、約11時間の移動だ。翌日の作業初日は早朝にホテルを出発し、震災によって凸凹になった悪路を、バスで約1時間30分ゆられ、石巻市にあるボランティアセンターに向かった。車窓から見えた被災地の光景を目の当たりにし、涙するものもいた。船が刺さった家、壁が崩れ土台と階段だけ残っている家、歩道を塞ぐがれき、がれきの下敷きになってひしゃげてしまった車、壊れかけの橋……。そして、バスを降りると、腐敗した魚介やゴミ、泥、燃料などが入り混じった異臭が鼻を刺激した。テレビの中の出来事だった震災が一気に現実味を帯びてきた。



風光明媚な漁師町の変わり果てた光景に  
言葉を失い、涙があふれた。

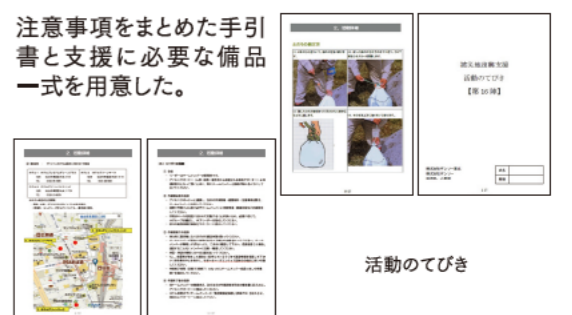
決して楽ではない力仕事

石巻駅前の道に溜まってしまったヘドロの清掃から始まり、商店街の店舗や公民館、民家の清掃や泥出しなど、作業は多岐に渡った。経験したことのない力仕事、着慣れない重装備、そして、余震への不安や緊張感。見渡す限り広がるがれきの山に、気が遠くなる。今、自分がしている作業は、被災地にどれほど役に立っているのか、無力感に襲われ、心が折れかけることもあった。そんなとき、半壊した家屋のあちこちではためくのぼり旗の「負けねとがんばる 明日を夢見て!」が、んばっへ石巻!というメッセージが目に入る。被災地の方も踏ん張っている。一步一步でも、前に進むことに意味がある。そう思い直して、終わりの見えない作業に戻るのだ。

被災者の気持ちに寄り添う難しさ

当時一番悩んだのが、現地の方への接し方だ。被災地には自分たちの想像を遥かに超える悲しみと苦しみが満ちていたため、元気はつらな態度で挨拶をすることは違和感があつた。県外から訪れた私たちに明るく接してくれたが、コミュニケーションを深めようと「ご家族やご自宅は無事でしたか?」などと震災の話をする、声を詰まらせてしまう方もいた。かといってその話を避けると、どこか他人行儀になってしまう。とこまで踏み込んでいいのか、距離感を掴むことに苦労した。

現地へ派遣する社員に配布したもの(一例)



当時を振り返る



人事部(当時)  
松山拓也さん

「とにかく走りながら考えました」  
最初は未知数なことばかりでしたが、とにかくスピード感を大切にしました。問題を解決したり、情報を整理したり、部署間で調整したりといった、全体のコントロールに大変苦労しました。「現地現物の精神で、人事部門から震災後すぐに現地に行った社員からの信頼できる生の情報をベースに決めていきました。人的支援の同行で被災地に足を踏み入れ、被害状況を生で見たときには、間接情報では伝わり得ないインパクトを感じたことを覚えています。」



当時を振り返る



人事部(当時)  
東輝明さん

「緊張感でいっぱいでした。」  
「東北に入り、その場で判断し、柔軟にいろいろ決めてきてほしい」と命を受け、一人で被災地に足を踏み入れました。ボランティアは現地の方々に迷惑をかけてはいけないので、自分たちの身は自分で守らなくてはいいけない。大きな余震や津波があったとき、避難の判断や指示をするという大役も仰せつかっていました。実際、揺れを感じることもあったので、どうか皆が無事に過ごせますようにと、そればかりを願っていました。」



# 自動車部品メーカーとしての段取り力と デンソーらしい人間力が支援に生かされた。



## 支援先で頼られる存在に

初期は減産対応を余儀なくされている生産現場の人から始まったが、後半ではそれ以外の社員も業務の合間を縫って、積極的に参加するようになった。メンバーたちは、如何なくデンソースピリットを発揮し、工程をほとんど効率化・仕組み化した。また、度重なる作業で経験知が蓄積され、ボランティアセンターで説明を受けることなくホテルから直接現場に入ることも増えてきた。さらに、マイクロバスで移動できることを生かして、ボランティアセンターから遠い場所にも支援の幅を広げた。ついには、牡鹿半島にまで足を延ばすことになった。そこで出会ったのが、ホヤ漁を営む三浦さんだ。ホヤの殻むきや仕分けなど、考えもしなかった支援である。

## 心温まるお付き合ひ

作業を少しでも効率化させるためにさまざまな提案をする社員たちを見て「さすがはデンソー、段取りのプロだね。」ホヤ漁師の三浦さんはそう褒めてくれた。手伝いながら、いろいろなことを話し、人間同士の純粋な結びつきが生まれた。また、家屋で泥出し作業をしていたところ、クラーボックスいっぱいに入ったペットボトルを持って来てくれた方や、おにぎりを作ってくれた方、被災者のための炊き出しで出されていた食事を「よかったですら食べて」と言ってくれた方もいた。ご自身や家族が苦しい状況のなかでも、優しさや心遣いを与えられる被災地の方々から、人間としてたくさんのお礼を学んだ。



## 「当時を振り返る」



総務部(当時)  
澤井宣利さん

### 「デンソーの支援規模を誇りに」

事務局のメンバーとして、実際に未曾有の被害を受けたところにお邪魔し、現地を見て、被災した方々と直接話す機会があったよかったです。思っています。こういった形で支援させてもらえたというのはありがたい限りです。当時の石巻では、この規模で連続的に支援していたのはデンソーだけだったと思います。今後こういった支援を上手く引き継いでいければと思います。

## 「当時を振り返る」



熱製2部(当時)  
(第一陣)  
Aグループリーダー  
児玉正則さん

### 「被災地の方に勇気をもらいました」

報道を見て、自分も何か被災地の役に立ちたいと思っていました。正直、作業は大変でしたが、被災地の方から笑顔で「ありがとう」という言葉をかけていただき、感謝しました。中には家族や親族をなくされた方もいらっしゃり、自分が逆の立場ならとても笑顔になれないと思いますが、被災地の方の思いやりや我慢強さ、団結力に逆に勇気をもらいました。

## 「当時を振り返る」



熱製2部(当時)  
(第一陣)  
Bグループリーダー  
イマムラ  
フィルダウスさん

### 「忘れることが出来ない光景です」

私は母国であるインドネシアのスマトラ島沖地震のときに、日本の方にとっても大きな支援をしていただき、その恩返しを少しでもしたいと思っていました。被災地を生で見た光景は二度と忘れることが出来ません。思わず言葉を失い、気がつくとも自然に涙が頬を伝っていました。被災地にはまだまだ人手が必要です。日本の団結力に期待します。

## 全16回にわたった支援、それぞれに 忘れられない出来事があり、出会いがあった。

### 計74日にわたり、総勢674名が参加

4月17日から8月10日まで続いた石巻での復興支援。毎回多くの社員が参加し、それぞれ5日間ずつ作業した。人的支援に参加した社員たちにとって、地震の傷跡を間近に見て、深い悲しみのなかにいる被災者に寄り添うことは、大変貴重な経験だった。「ぜひもう一度、参加したい」と申し出て繰り返し参加するものもいた。業務の都合などで参加できなかった社員もいたが、被災地に赴いた同僚の業務をバックアップするなど、間接的に支援をした。この全社一丸の取り組みにより、復興支援への意識が高まり、この後に続く「10年支援」のマイルストーンにもなったといえる。



第11陣



第4陣



第14陣



第7陣

### 受け入れてくれた現地の方々に感謝

最後に、この人的支援は現地でお世話になった方々にはなし得なかった計画だ。右も左もわからない私達に作業の仕方をご指南くださったピースポートの方々。グリーンホテルは、震災後間もない時期に30名もの人員の受け入れに踏み切ってくれて、支援期間中ずっと会議室にデンソーの荷物を保管してくださいました。そして、毎回作業現場などに送迎してくれた宮城交通のマイクロバスの運転手さん。被災しているのにも関わらず、笑顔で明るく接する姿に、社員たちは逆に励まされたのだ。

## 「当時を振り返る」



松月産業  
ホテルグリーンチェーン  
今中美恵さん(右)  
鈴木里佳さん(左)

### 「ボランティアへの姿勢に感動」

当ホテルは震災の翌日から営業し、行政や復旧工事に関わる方々にご利用いただいておりますが、施設の水道管などはまだ復旧作業中でお食事もリネンも満足にご提供できないことに心苦しさを感じておりました。その中、企業からのボランティアで予約が入ったことに驚きました。デンソーさんは現地で必要なものをしっかりと揃えて現地入りし、目的意識を持って統率を取りながら行動する姿から、企業としての力を感じました。

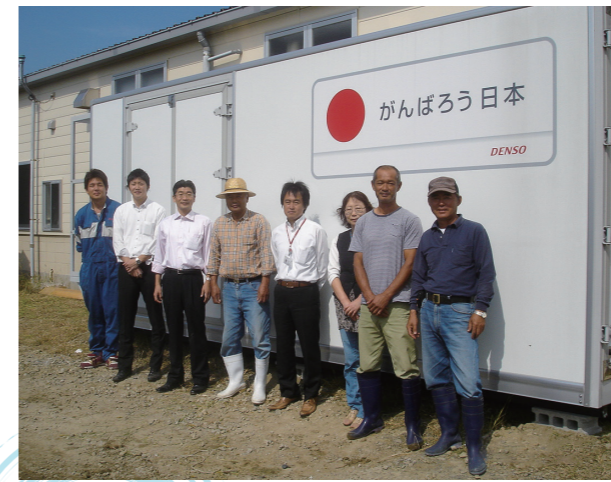
## 派遣実績 (宮城県 石巻市等)

派遣期間	人数	日数	延べ活動人数	
第1陣	4/17 ~ 23	30	5	150
第2陣	4/24 ~ 30	56	4	224
第3陣	5/9 ~ 14	51	4	204
第4陣	5/15 ~ 21	60	5	300
第5陣	5/22 ~ 28	41	5	205
第6陣	5/29 ~ 6/4	17	4	68
第7陣	6/5 ~ 11	18	5	90
第8陣	6/12 ~ 18	28	5	140
第9陣	6/19 ~ 25	42	5	210
第10陣	6/26 ~ 7/1	21	4	84
第11陣	7/2 ~ 7	37	4	148
第12陣	7/8 ~ 14	51	5	255
第13陣	7/15 ~ 21	58	5	290
第14陣	7/22 ~ 28	53	5	265
第15陣	7/29 ~ 8/4	47	5	235
第16陣	8/5 ~ 10	64	4	256
合計		674	74	3,124



# 《 長期的に絆を育む 》 10年支援 ずっと、寄り添う。 その決意を「10年」というワードに込めた。

## 冷凍コンテナ



デンソーの製品や技術を被災地に  
4月13日の震災緊急対策概要発表を機に、  
震災復興のための商品創出プロジェクトが発足。  
義援金や物的支援、人的支援に加えて、デンソー  
の技術や製品のなかに被災地で役立てられる  
ものはないかと考えた。そのなかで目をつけた  
のが、冷凍コンテナだ。通常は、運送会社に車載  
の冷凍機を納品しているのだが、シャーシを取  
り外せば、定置型の冷凍コンテナとしても使え  
るのではないかと。夏場に向け、食料保存庫が必  
要な被災地に届けたい。デンソーセールス東北支  
社にも協力を仰ぎ、宮城県・岩手県で困ってい  
る事業者に10台を貸与することが決定した。

### 早期の貸与を目指して

当時デンソーが量産していた車載用冷凍機  
は、冷凍された状態を保つことはできるが、  
氷を作ったり冷凍したりする仕様ではなかつ  
た。丁度、冷凍能力が高く潮風にも強い海上  
コンテナ用冷凍機を開発中であったが、量産



### エンジニアとして長年培ってきた経験が 宮城県の漁業を救う、ひらめきへと繋がった。

津波で全てを失っても、前向きさを忘れない。  
その姿勢に、鼓舞されながら支援に励んだ。  
品として提供するには、とても今夏には間に  
合わない。スピードを重視し、量産品の車載用  
冷凍機を応用した冷凍コンテナを作り上げ、  
貸与することにした。これでも十分お役に立  
てるであろう。あとは現地の状況を鑑みて、  
個別に塩害対策などを施せばいい。エンジニア  
としての勘が働いた。早速、宮城県庁とせん  
だいみやぎNPOセンターの方に候補となる  
漁業組合や企業などを紹介してもらい、ピア  
リングを開始。暑くなる時期までには貸与を  
完了させたい。普段からは考えられない、超  
短期モノづくりが始まった。

なにもなくなった漁業の町で  
ヒアリングのために宮城県に足を運んだブ  
ロジェクトメンバーは、声を失った。震災の津波  
により、漁業を行っている沿岸部は何もない  
状態に。もう、この地で漁業を営んでいくの  
は無理なのかもしれない。そんな絶望感に包  
まれていた。

震災前、宮城県は本州1位のカツオの水揚  
げ量を誇っていた。漁業においてはじめて冷  
凍保存の技術が取り入れられた場所でもあ  
り、水揚げ量の約7割は加工用や保存用と  
して冷凍保存されたという。つまり、宮城県  
の水産業にとって、船と同じくらい冷凍庫は  
なくてはならないものだったのだ。

### 壊滅的な被害を受けた事業者

そのなかで、懸命に前を向き、復興を  
目指す事業者に出会った。気仙沼市にある、  
創業大正10年の老舗「斉吉商店だ」。金のさ  
んま」という骨までやわらかい無添加の  
佃煮などを製造する水産加工会社だ  
が、工場もろとも全て津波にさらわれて  
しまった。ただ、創業時から継ぎ足して  
使っていたさんまのタレだけ、流された車  
の中から奇跡的に見つかったという。地  
元の漁協組合ですら復興に二の足を踏  
んでいるなか、社長は「とにかく何かを始  
めないと、復興なんてできない。できるこ  
とからやっていきたい」と、5月の時点です  
でにいくつもの立て直しプランを考えてい  
たのだ。人間の強さに、感銘を受けた。

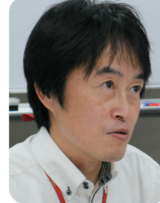
### 冷凍コンテナの使い道は様々

冷凍コンテナは、宮城県および岩手県内  
の10箇所に貸与され、原材料や加工品の冷  
凍保存や、ノリの種付けをした網の冷凍  
保存、農産物の冷蔵保存、ワカメ等の冷凍  
保存、氷の冷凍保存などに役立てられた。  
なかには、エンジニアも予想だになかった  
使われ方をした事例もある。岩手県立博物  
館から、「被災してしまった古文書を冷凍  
保存するために使いたい」と要請されたの  
だ。冷凍したものを乾かし、泥をはいでい  
くことで、古文書を再生させるのだという。  
自分たちが扱う製品が歴史保存の一翼を  
担うことになるとは、驚きである。

### 事業再開のスタート地点

「もう事業をたまたまうか。」そう諦めかけ  
た事業者にとって、冷凍コンテナの貸与は事  
業再開の背中を押す存在となった。設置が  
完了したときは、感謝の言葉をたくさんい  
ただいた。これを機に、復興の軌跡が始まっ  
たのだ。10台の冷凍コンテナは、その後数年に  
わたり貸与が続いた。その間、被災地の方々  
の尽力により、徐々に復興を遂げてきて今に  
至るのだ。斉吉商店も無事に生産を再開さ  
せ、今となつては全国の百貨店イベントに出  
店するなど震災前より精力的に活動してい  
るようだ。社員たちの技術力と人間力によ  
る、デンソーらしい支援となった。

### 「当時を振り返る」



山崎 淳さん  
FVC事業推進部  
コーポレートエン  
事業室

「私達の技術が役立つ喜び」  
エンジニアとしてすぐにでも何か  
できることは無いかと真剣に考え、  
震災翌月には交通手段もままなら  
ない中、東北に足を運んでいました。  
「デンソーさん、本当に本当にありが  
とうございました。」冷凍コンテナ納  
品の際、どの事業者様からも例外な  
く笑顔でかけて頂いたこの言葉。逆  
に私たちが元気をもらったことを  
昨日のことのように思い出します。  
自分達の技術を以て、人のために尽  
くすことの嬉しさ、尊さ。そんなこ  
とを肌身で感じる事ができた非  
常に貴重な経験でした。

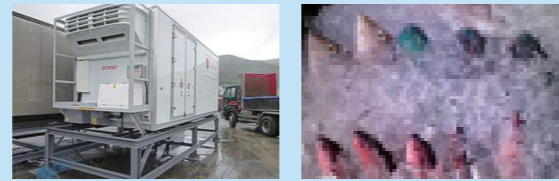
### 貸与先一覧(全10台)

#### 【岩手県立博物館(盛岡市)】2011.6.16~



被災した古文書再生のための冷凍保存

#### 【宮城県牡鹿漁協組合(石巻市)】2011.9.20~



氷の冷凍保存

#### 【岩手県山田町道の駅やまだ】2011.6.21~



地元農産物の冷蔵保存

#### 【宮城県漁協組合宮戸西支所(東松島市)】2011.9.28~



牡蠣、海苔の冷凍保存

#### 【宮城県(株)斉吉商店(気仙沼市)】2011.8.23~



原材料、加工品の冷凍保存(サンマ)

#### 【宮城県漁協組合宮戸支所(東松島市)】2011.10.5~



ワカメ等の冷凍保存

#### 【宮城県塩釜市漁協組合】2011.8.30~



牡蠣等の冷蔵保存

#### 【宮城県漁協組合志津川支所(南三陸町)】2011.10.12~



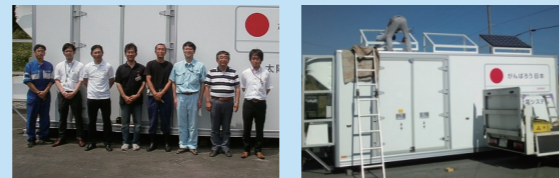
エサ(エビ、イカ)の冷凍保存

#### 【宮城県漁協組合関上支所(名取市)】2011.9.7~



鮮魚用氷の冷凍保存

#### 【宮城県気仙沼水産加工協同組合】2012.7.27~



カツオ冷凍保存



# 自転車寄贈



**刈谷市の廃棄・放置自転車を修理**

震災後、被災地では道路のアスファルト舗装は崩壊。ガソリンも不足していた。車やバイクでの移動ができない状態が続くなか、重宝されていたのが自転車だった。しかし、その自転車も不足していたという。デンソーは被災地支援の一つとして、できるだけ多くの自転車を寄贈したいと考えた。新品を寄贈するのでは数が足りない。そこで、刈谷市内の放置自転車を活用できないかと、管理者の刈谷市に対し「デンソーが修理を担当するから、協働で被災地支援活動を行わないか」と提案。デンソーならではの、モノづくりによる支援である。

## WAFCAとデンソー工業学園が協力

まずは、デンソーが設立したNPO法人アジア車いす交流センター(WAFCA)に協力を仰いだ。ボランティアで車椅子修理をしている社員のOBは、自転車も修理するノウハウを持っているからだ。さらに、デンソー工業学園で技能を学ぶ生徒たちも手伝えば、相当数の自転車を再生できるだろう。そこで、WAFCAのボランティアが自転車修理の仕方を教え、生徒たちが修理することに。できるだけ早く被災地に届けたい。短期集中で作業が進められていった。60代のボランティアと10代の生徒が師弟のようになり、現場は規律がありつつも明るく和気あいあいとした雰囲気包まれた。

## 被災地支援が、世代を超えた繋がりを生む。デンソーが誇るものづくりを、未来へ引き継ぐ。



# 高砂仮設住宅との縁



**仙台市高砂仮設住宅などにマスクを寄付**

震災後初めての秋、「マスクを寄付したいのですが、必要とされている場所はありませんか」と、社会貢献活動で繋がりのあったユニーク株式会社から相談を受けた。そこで被災地支援活動に携わっている社員ボランティアを通じて、仙台市高砂地区の避難所運営を行っていた浅見氏を紹介してもらいマスクの必要性を確認。季節柄インフルエンザの流行もあり、ニーズが高まって来た中での寄贈の話であったため、高砂仮設住宅に住む方々からは「わー！嬉しい！」と、歓喜の声が湧き上がったという。その後、「ぜひ、他の地域にも行き渡らせてほしい」という浅見さんの声により、気仙沼市などにも声をかけることに。ユニークの物流で、宮城県、岩手県、福島県を中心に、約1945万枚分を支援することとなった。

## 駅伝で女子陸上長距離部を応援

その冬、女子陸上長距離部も出場する第31回全日本実業団対抗女子駅伝競走大会が、クイーンズ駅伝 in 宮城として初めて仙台市を中心に開催されることになった。コースに近い高砂地区の方々に「応援グッズを作りましょう」と、一緒に応援していただけたらいいかと、お声がけをしたところ、小雪の舞う寒い日にも関わらず約350人が沿道に集まった。当日は他にも、はあとふる基金の支援を機にご縁のできたNPOなどの支援団体の方々も駆けつけてくださった。沿

## 被災地の方々から、選手へのエール。スポーツを通して、お互いを励まし合った。



## 約350台の自転車を被災地に

4月28日から数回に分けて、宮城県に約290台、福島県に約60台を寄贈した。被災地のために何かをしたいと思っていた生徒たちは、自らが修理した自転車を現地で使ってもらえることを喜んだ。サビの落とし方やネジの締め方など、モノづくりの基本を実践的に学ぶこともできた。WAFCAのボランティアも同じく、日頃培ってきた技術が被災地に活かされたことで、活動へのモチベーションも高まった。刈谷市にとっても、廃棄・放置自転車を活用できた好事例となった。

## 「当時」を振り返る



WAFCA事務局長  
(当時)  
坂元邦晴さん

**「三方よし」の取り組み**

企業と行政、NPOという立場の違いが、被災地のために一体となり、喜んでもらえることは大きな成果でした。関わる全員が心地よい達成感と満足感を得られました。その結果として、NPO法人パートナーシップ・サポートセンターから「パートナーシップ賞」をいただき、新聞や書籍で取り上げられたことを嬉しく思います。WAFCAにとっては、車いすに加え、自転車修理の活動を広げるきっかけになりました。

道に並ぶ「DENSO」の応援旗と応援グッズを手に、「デンソーがんばれー！」と声を上げる現地の方々。他社の応援団から「このあたりには拠点がありませんか？」と驚かれるほどの大応援団だった。

## 被災地からの声援が選手に届く

溢れんばかりの声援はしっかり選手に届き、女子陸上長距離部は第33回の大会で見事大会新記録で初優勝を遂げた。「選手のみならずのご活躍に、感動と元気をいただきました」と、まるで自分たちのことのように喜ぶ被災地の方々。大会後に、地元小学校で陸上教室を開催するなどお付き合いは続き、翌年以降の駅伝大会でも、高砂仮設住宅の方々を中心にご活躍の皆さんが応援に駆けつけてくれた。「デンソーさんへ優勝めさして頑張ってください」と寄せ書きの書かれた応援旗も掲げられた。それに応えるかのように女子陸上長距離部の勢いは止まらず、その翌年、翌々年も優勝・三連覇を遂げたのだ。

# フォークリフト寄贈



## 被災企業の再建を願い、心をこめて整備した。遊休フォークリフトを被災地へ

津波は沿岸部の企業から生産設備や機材を奪い、震災から2年経ってもなお、機材は不足していた。そこで、刈谷市商工会議所の復興支援プロジェクトの一環で、被災した鉄工所や食品会社などの生産活動に必要な中古フォークリフトを寄贈することに。機種や使用年数の情報を提供し、必要としている企業とマッチング。寄贈前に製造部が自費で部品交換や整備を行った。そして、「がんばろう東北」というステッカーを貼り、社員が応援のメッセージを色紙に書いた。2013年の初回は、フォークリフトの出発式を盛大に開催。復興に思いを馳せ、被災地へと向かうトラックを見送った。その後、2015年までの3年間で遊休フォークリフト計21台を寄贈した。

# スポーツでの支援



## 「楽しんでもらえれば」と選手が一丸となった。

### 実業団チームの取り組み

女子陸上長距離部以外のデンソー実業団チームでも、チャリティを兼ねた活動が各所で行われた。女子ソフトボール部は、3年連続で宮城県で合宿し、ソフトボール教室を開催。選手たちは技術指導にとどまらず、子どもたちを楽しませることに注力し、会場を沸かせた。

女子バレーボール部は地元チームと震災復興マッチを行い、地域の方々と無料招待。バレーボール教室を開催し、選手と触れ合う時間を設けた。その後、チームのセカンドホームを福島県郡山市にし、今でも定期的に交流をしている。



# ベルマーク寄贈活動



被災地に足を運べなくても、遠く離れた愛知からできる支援がある。

ベルマークを集めて寄付

マヨネーズやスナック菓子など日常でよく見かける商品のパッケージに付いているベルマーク。これを切り取って集計しベルマーク教育助成財団に収めると、1点1円で換算され、教育現場に必要な設備や備品、教材の購入費用に充てることが出来るというものである。この活動を2012年から継続して行っているのがデンソーグループハートフルフレンド<sup>※</sup>。昼ボラ隊だ。その名の通り、昼の休憩時間にボランティアをするグループで、子育てなどで就業後や週末に時間の取れない社員たちが昼休みに集まり、それぞれのペースでボランティアをする。ベルマークは捨てればゴミ、集めれば社会貢献。分別は家でも簡単にできる。その手軽さが魅力で、本社はもちろん各製作所で昼ボラ隊のチームが立ち上がるほど活動が広がった。東北に行くことはできないけれど、愛知で何かを支援したいと思う社員たちが次々に参加をするようになったのだ。

校庭用大時計を被災地に

最初に決めた寄付先は、宮城県石巻市立開北小学校。津波により校庭にある時計が止まってしまったという話を、被災地で支援をしていたデンソー社員から聞いたのだ。そこで、児童が以前のように広い校庭で元気よく思いっきり遊べるように、誰の目にもとまり、今後の自然災害でも止まらないような大きな時計を贈り、励まそうとしたのだ。何としても、卒業式までに贈りたかった。

ベルマークでの支援を継続

校庭用大時計を贈った以降も、昼ボラ隊は毎年被災地の小学校1〜3校にベルマーク10〜20万点分の寄贈支援を続けてきた。寄贈先には、今何が必要なのかをあらかじめヒアリングし、できるだけニーズにマッチする設備や備品を贈ることに。これまで、屋外用掲示板や逆上がり補助器、扇風機に石油ストーブなど、多岐にわたる設備や備品を贈っている。そして寄贈の際には、なるべく現地に赴き、年々進む被災地の復興や消えない震災の傷跡をこの目でしっかり確かめる。さらに、学校ではものを渡すだけでなく、窓拭きや草むしり、廊下の掃除などを手伝ったり、ときにはデンソーの女子長距離選手OGも帯同しランニング教室を開催したりして、短い間ではあるが子どもたちとの交流を楽しむのだ。

温かいお礼の言葉に次なる支援を誓う。



必要な点数は50万点

マヨネーズ1本のベルマークは3点なので、とてつもない目標である。社内の売店に「この商品にはベルマークが付いています」というPOPを貼ってもらったり、各部署にハサミと箱を設置し「ゴミを捨てる前にベルマークを切り取って下さい」とお願いもした。また、5点に換算できるインクカートリッジに目をつけ、年賀状印刷で使い終わったものを提供してもらった。さらに、地元のコミュニティFMに出演したり、刈谷駅前呼びかけたりと、社外からの協力も募り、50万点を集めきったのだ。こうして集められた無数のベルマークだが、ベルマーク教育助成財団に寄付するためには、企業ごとに仕分け、点数を数える必要があり、地道で果てしない作業が続く。そこで、昼ボラ隊以外の社員にも協力を仰ぐほか、デンソーグループハートフルまつりの一角に仕分け体験コーナーを設けるなど活動の啓蒙をした。

子どもたちのお礼に全員が、涙した。

寄贈式での感動的な出来事

2013年3月16日、校庭用大時計の寄贈式に出席するため、昼ボラ隊のメンバーは被災地に降り立った。校庭には葉っぱの生い茂る木が一本もなく、校舎には津波の跡が残っている。校長先生へ目録贈呈が終わると、卒業式を終えた児童たちが一斉に運動場へと走ってきた。手には大きなお礼の寄せ書きを抱えている。「この時計とともに私たちが成長していきます。この時計が時を刻むとともに私たちが時を刻んでいきます」というメッセージや、心のこもった「ただの子守唄」の合唱。きつと何度も練習したのであろう。家族や友人を失うなどつらい思いをした児童たちが私たちが精一杯贈りてくれた。その真っ直ぐな強い眼差しは、メンバー全員の涙を誘った。



※社員が気づいた社会課題に対し、メンバーを募って社員自らが企画運営する有志のチーム

苦労が報われる瞬間

寄贈先の学校から帰る時、窓から児童が「デンソーさんありがとう」と大きな声で声をかけてくれることもある。よるこんでもらえることが、何よりのご褒美である。これまでの地道で果てしない作業での苦労がすべて吹き飛んでいく。「人のお役に立てた」という充実感に包まれるのだ。昼ボラ隊は震災から10年を迎える現在でも本社や各製作所で活動を続けている。メンバーは年々入れ替わりますが、ここがボランティア体験の場となり、人を助けることや感謝されることの尊さを再認識する場となる。昼ボラ隊を経験した社員が、次年度はそれぞれの別のボランティア活動に飛び出していくことも多いのだ。

「当時」を振り返る



デンソーグループ  
ハートフルフレンド  
「昼ボラ隊」メンバー  
小川 修さん

「感動の寄贈式となりました。」  
石巻市立開北小学校に行ってきたこと、デンソーの代表者からは、現地の皆様の心情を察し「15分の予定で静粛に」と言われていました。ところが、子どもたちの精一杯のお礼と真っ直ぐなまなざしに、こみ上げる涙をおさえきれませんでした。私は、向日葵の種とメッセージをプレゼントとして用意していたのですが、いみじくも、この日は私の誕生日。子供たちを励ますつもりが逆に励まされ、すてきな贈りものをいただくことに。今でも激しく心打たれた寄贈式となりました。

## ベルマークでの寄付一覧

寄贈年度	寄贈先	寄贈内容	寄贈点数
2012年度	宮城県石巻市立開北小学校	校庭用大時計	500,000点
2013年度	宮城県石巻市立鹿妻小学校	屋外用掲示板	200,000点
2014年度	宮城県石巻市立渡波小学校	屋内用カーブミラー	220,000点
	福島県いわき市立藤原小学校	ワイヤレスアンプ	160,000点
2015年度	福島県いわき市立長倉小学校	逆上がり補助器等	160,000点
	宮城県石巻市立牡鹿中学校	長机8台	161,909点
2016年度	宮城県仙台市立高砂小学校	ボール整理かご等	100,446点
	福島県いわき市立湯本第一小学校	ワイヤレスチューナユニット	104,520点
	岩手県上閉伊郡大槌町立大槌学園	プリンター等	198,105点
2017年度	宮城県気仙沼市立面瀬小学校	電子ピアノ等	97,423点
	福島県いわき市立磐崎小学校	石油ストーブ	116,633点
2018年度	福島県いわき市立湯本第三小学校	大型扇風機2台	118,483点
	宮城県仙台市立若林小学校	キッズドッジボール・ドッチビー	98,452点
2019年度	福島県いわき市立湯本第二小学校	大型扇風機2台	118,483点
2020年度	福島県いわき市立植田小学校	一輪車用スタンド	58,600点





愛知から被災地へ、笑顔をお届けしたい。そして、メッセンジャーとして、被災地の今“を伝える。

## フラダンスチームを独自に結成

震災から約1年後の2012年4月、デンソーグループフラガールが誕生した。きっかけとなったのは、同年7月に開催されるハートフルまつり。企画の一つとして被災者でもある、スバリゾートハワイアンズのフラダンサーが復興を訴え全国巡業をする映画「がんばっぺ！フラガール」を上映することになったのだ。さらに印象に残る企画にすべく、本家のフラダンサーに来社要請をしてみたが、既に施設が再開しており対応ができないとのこと。ならば、自分たちでフラダンスを踊って、愛知から被災地に笑顔をお届けしよう。そんな思いで始まったのだ。

## 「人」にフォーカスした支援活動

踊るのは、有志が集まったデンソーグループの女性社員たち。復興支援の一環としては、直接の支援活動ではないという点で異色の取り組みであった。また、上司から露出の多い衣装で踊るというイメージがあると抵抗感を示されたこともあり、活動の承認まで2ヶ月もかかったという。メンバーが愛知から被災地に思いを馳せて踊る、そしてその活動を見守る周りの人々やステージを観て感銘を受けた人が、自分にもなにか支援はできないだろうかかと考える。これまでボランティアというものに興味なかった人、目を向けてもらえないチャンスになり得る。震災を風化させず、支援の輪を広げるきっかけにしていきたい。そう強く訴えた。その熱き思いが、実現へと導いた。

## 短期間でステージを作り上げる

結成が決まってから本番までは、たったの3ヶ月。「フラダンスで被災地に笑顔をお届けませんか」と社内呼びかけたところ、23名のメンバーが集まった。その中の8割が、未経験者だった。踊る曲は？ 振り付けは？ 衣装は？ 講師は？ 練習は？ まだ何も決まっていなかった。ハートフルまつりにボランティアとして協力してもらおう予定だった愛知淑徳大学にフラサークルがあるということを知り、一緒に踊らせてもらおうことにした。また、予算も限られていたため、メンバーにできるだけ負担をかけないよう知恵も絞った。ステージで着用するパウスカートはメンバーに練習用をかねて好きなものを購入してもらい、ステージで身につけるレイや花飾りは、100円均一ショップで購入したものをベースに、手作業でアレンジしたのだ。



## 笑顔のステージは、観客の心を震わせた。その光景に、活動継続を決意したのだ。

技術より笑顔を大切に練習  
目指したのは、上手なステージではなく、メッセージ性のあるステージ。復興支援のために踊るのなら、笑顔でいることが最も大切である。そして、思いを一つにしていることを伝えるには、最低限動きが揃っていないと伝えない。その2点に集中し、練習を重ねた。苦勞したのは、笑顔だ。一生懸命踊ろうと思えば思うほど、つい笑顔が忘れてしまうのだ。また、揃って練習ができないという問題にも直面。メンバーによっては、本社から離れた製作所に勤務しているため昼休みの練習に参加できなかったり、子育てのため終業後の練習に参加できなかったりしたからだ。それが空いている時間に練習できるように、わかりやすい動画を作り、自主練習に励んだ。全員が揃ったのは、本番の前だった。

想いが伝わったステージ  
そうして迎えた本番。「被災地の状況に加え彼女たちがこの3ヶ月間がんばってきたことを届けたい」と、練習風景などの映像をドキュメンタリー風にまとめ、ステージのバックに流すことにした。決して完全ではないけれど笑顔で一生懸命踊る姿、そして、ここに至るまでの苦勞。被災地を思う真剣な姿が観客の心を打ち、涙する方もいた。その光景を見て「この活動を今後も続けていきたい」と強く思った。そして、活動継続を決めたのだ。

## スバリゾートハワイアンズとの交流

活動を継続するに当たり、スバリゾートハワイアンズへ挨拶に行った。そして、復興支援のためだけにフラダンスを踊るといふ活動に共感いただき、代表曲である「虹を」と復興への想いを綴ったオリジナル曲を踊ることへの特例の承諾を得た。さらに、絆の証として、現地のステージで踊らせていただいたのだ。スバリゾートハワイアンズのダンサーが施設でほかのチームを交えて踊ったのは、これが最初で最後だといふ。その後も交流は続き、継続支援していることに對し、デンソーに表敬訪問され、社員向けにステージを開催して下さったこともあった。そこに愛知に避難していた、いわき市出身のこ家族他を招待したところ、後日、便せん6枚にわたって感謝と感激の言葉を綴った手紙をいただいた。

## 福島で作った手ぬぐいを販売

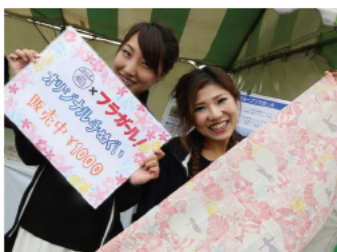
スバリゾートハワイアンズとの縁が生まれ、東北応援ツアーとして福島に足を運ぶうちに、野菜や米が作れなくなってしまう福島県の田畑を使って、オーガニックコットン畑として再出発をしている団体と出会った。原発やそれに伴う風評被害から立ち直ろうとしている方々を応援したい。そこで、自分たちで作った消しゴムはんこを押して可愛くアレンジし、オーガニックコットン手ぬぐい「ふくしま潮目」の販売促進のお手伝いをした。

## 大切なのは、フラガールのステージを観て東北に思いを馳せた後、行動に移すこと。

## ステージの後、支援を呼びかける

毎年のハートフルまつりや、かりや3・11を忘れないのほか、震災関連のイベントには積極的に出向いた。ただ、ステージを見て被災地のことを考えてもらうだけではなく、なにか自分にもできることはないかと感じたときに、すぐ行動できるような機会を作ること、それが使命だ。会場で募金をお願いしたり、ふくしま潮目の手ぬぐいを販売したり、その場で気軽に出来る支援を呼びかけている。高齢者施設へ慰問に行く際には、フラダンスを披露したあとに、入居者の方々と一緒にベルマークの仕分け作業をすることも。「支援ができてうれしい」と喜んでもらえたという。

デンソーグループフラガールは、毎年メンバーが入れ替わりながら8期を迎え、これまでのべ178人が参加。現在はコロナの影響を鑑み、オンラインでの練習に切り替えたが、2021年3月をもって、一旦解散し、コロナ禍でも活動できる形を模索している。



期	年	内容	場所
第1期	2012	デンソーグループハートフルまつり2012	デンソー本社
		デンソーデバイス製造一部運動会	デンソー高橋製作所
		デンソー事務	デンソー本社
第2期	2013	スバリゾートのダンスチームとのコラボステージ(東北応援ツアー)	スバリゾートハワイアンズ(福島県)
		デンソー仕入先総会	名古屋東武ホテル
		デンソーグループハートフルまつり2013	デンソー本社
第3期	2014	スバリゾートハワイアンズによるデンソー表敬訪問	デンソー本社
		老人ホーム あいおい刈谷 慰問	あいおい刈谷
		アースデイいわきモリコロパーク	モリコロパーク
第4期	2015	県内避難者招待フラチャリティイベント	刈谷市総合文化センター
		刈谷豊田総合病院 慰問	刈谷豊田総合病院
		デンソーグループハートフルまつり2014	デンソー本社
第5期	2016	児童養護施設 南緯平和学園 慰問	南緯平和学園
		老人ホーム あいおい刈谷 慰問	あいおい刈谷
		東日本復興支援イベント(TALK & MUSIC SESSION)	江南市民文化会館
第6期	2017	日本ヘルニア学会学術集会	名古屋マリットアソシアホテル
		デンソー豊橋おらんとまつり	デンソー豊橋製作所
		デンソーグループハートフルまつり2015	デンソー本社
第7期	2018	デンソー高橋フェスタ	デンソー高橋製作所
		デンソー-同久比ふれあいフェスタ	デンソー-同久比製作所
		あいち小児保健医療総合センター 慰問	あいち小児保健医療総合センター
第8期	2019	老人ホーム あいおい刈谷 慰問	あいおい刈谷
		東日本大震災復興支援3Days 絆ステージつながる〜	江南市民文化会館
		かりや3.11を忘れない〜キャンドルナイト〜	刈谷駅前北口
第9期	2020	老人ホーム よるさとの楽園 慰問(東北応援ツアー)	よるさとの楽園(福島県)
		デンソーグループハートフルまつり2016	デンソー本社
		東北福台村	久屋大通り公園 希望の広場
第10期	2017	大信精機 大信フェスタ	半田運動公園
		オールドヨタビコリデー	トヨタスポーツセンター
		北名古屋市制10周年事業「10歳のあなたへ」	北名古屋市文化活動会館
第11期	2018	老人ホーム 博愛ナッシングヴィラ 慰問	博愛ナッシングヴィラ
		老人ホーム あいおい刈谷 慰問	あいおい刈谷
		デンソー労働組合 ユニオンカーニバル	ラグーナ蒲郡
第12期	2019	NPO法人つどいはあとの交流会(東北応援ツアー)	安成公民館(岩手県)
		デンソーグループハートフルまつり2017	デンソー本社
		東北大学電気関係協会 東海支部総会	ロスクエア
第13期	2020	老人ホーム 博愛ナッシングヴィラ 慰問	博愛ナッシングヴィラ
		老人ホーム あいおい刈谷 慰問	あいおい刈谷
		デンソー-同久比ふれあいフェスタ	デンソー-同久比製作所
第14期	2021	老人ホーム 博愛ナッシングヴィラ 慰問	博愛ナッシングヴィラ
		東北との絆企画PR&かりや3.11を忘れないイベント	デンソー本社
		東北との絆企画PRイベント(西尾わくわくホリデー)	デンソー-西尾製作所
第15期	2022	老人ホーム 博愛ナッシングヴィラ 慰問	博愛ナッシングヴィラ
		デンソーグループハートフルまつり2019	デンソー本社
		老人ホーム 博愛ナッシングヴィラ 慰問	博愛ナッシングヴィラ
2020	デンソーグループWeb/ハートフルまつり2020	公式YouTubeチャンネル内	

## 当時に振り返る



総務部 大海留美さん

「東北を思いながら練習」  
フラダンスを切り口に支援を呼びかければ、少しとっかかりにくい社会貢献にも興味を持ってもらえるのではないかと思います。チームの結成を提案しました。メンバーにはフラダンサー未経験者が多く、もちろん指導経験者もおりませんでした。社員だけで作り上げることにこだわりました。厳しいこともあったと思いますが、復興支援という一つの目的があったからこそ一致団結できたのだと感じています。今でも、定期的に東北に足を運び、被災地の現状をしっかりと目に焼き付けています。

フラガールでの募金額  
累計 2,007,157円





# ハートフルまつり



縁をつなぐ場所として  
多くの参加者の心を動かし、意義のあるものとなった第1回からその後、ハートフルまつりは開催されている。毎年テーマは異なるが、今でも、東北に想いを馳せて踊るフラダンスのステージや、東北の小学校に寄贈するためのベルマークの仕分け体験は続いている。そして、斉吉商店やNPO法人みどり会、いわきおとんとSUN企業組合の方々から東北からはるばる駆けつけてくれるのも恒例。「金のさんま」や「ふくしま潮目」など、販売される商品はどれも人気で、東北と愛知の架け橋になっている。

イベントへの参加もまた被災地の応援の一つ。  
社会貢献のイベントを企画  
震災から1年余経った2012年7月、気軽な社会貢献を知ることができ、仲間や同志と出会い、それを行動に移すきっかけとなるようなイベント、デンソーグループハートフルまつりを開催した。社員や社員の家族、地域の皆様にも楽しみながら参加してもらいたい。そんな思いで企画した第1回目のテーマは、「東北に、日本中に、想いを伝えたい」。被災地で復興支援を行った社員と今も被災地で頑張る方々とのパネルディスカッションや、リヤカーで被災地をまわり演奏で激励した転輪太鼓の演奏が行われた。そして、今やイベントの看板的存在であるデンソーグループフラガールの活動も、ここから始まった。

# 東北応援ツアー



震災を風化させない  
震災から時が経ったが、依然として福島第一原発付近には立ち入ることができない。津波で流された野原にぼつんとできた真新しい駅は、閑散としている。風評被害により廃業してしまった農家や畜産農家のあった大きな敷地には、ソーラーパネルが並んでいる。町が復興したとはいえず、震災前の生活には戻れないのだ。現実を突きつけられると同時に、現地の方々の「前を向くしかない」という覚悟のようなものが、心を揺さぶる。家族や住む場所、生業をなくしてしまっただけの心が癒えない限り、本当の意味での復興は終わらない。私たちができるのは、この出来事を忘れないこと。そのために、毎年足を運ぶのだ。

毎年訪れることで育まれる絆がある。  
復興する様子を自分の目で  
今でも年に1回、デンソーグループフラガールと昼ボラ隊のメンバーを中心とした社員たちが、東北へ足を運んでいる。スパリゾートハワイアンズでダンサーと交流し、ベルマークを集めて得た備品を被災地の小学校へ贈呈。現地で清掃などのボランティアをしたり、津波で全壊した地域や帰宅困難地域、震災遺産などの視察をしたりするなかで、毎年少しずつ復興する様子を自分たちの目で確認。愛知からできる支援を考えている。



# かりや3.11を忘れない



手作りした灯りに追悼の想いをのせて。  
刈谷駅前をキャンドルで灯す  
毎年3月11日に、刈谷駅前が幻想的な光に包まれる。NPO法人まちづくりかりや主催のもと、デンソーグループや協賛会社、刈谷市、刈谷駅前商店街の支援の輪が一つとなって開催するキャンドルセレモニーだ。震災から1年を迎えた2012年に、「自分たちが今できることを考え、少しでもアクションにつなげたい」という想いから始まった。会場の中心には、東北への想いを一文字で表現した竹キャンドルの灯りがゆらめく。また、東北物産展や募金活動、東北郷土料理のふるまいやミニコンサートも行われ、道行く人々が足を止めて、東北へ想いを馳せている。

ペットボトルをキャンドルに  
当イベントにおけるデンソーグループの活動の中心となっているのが、デンソーグループハートフルフレンドの「3・11を忘れない」メンバーだ。刈谷駅周辺をほかに灯す、ペットボトルキャンドルを企画している。デンソー社内呼びかけて何百個もの使用済みペットボトルを収集。昼休みなどにそれらをカットしてキャンドルホルダーに加工している。3月11日に起こったことを、脳裏に焼きついているあの光景を、あの悲しみを、復興にかけた想いを忘れない。被災地の人々に寄り添いながら、心を込めて手作業で作っていく。一つひとつの灯りには、一人ひとりの祈りや想いが込められているのだ。

## 東北応援ツアー詳細

	日程	行き先	内容
第1回	2013年 3月15日～17日	宮城県・福島県	ボランティアメンバーで初の東北訪問▶宮城県石巻市、福島県いわき市訪問 ●被災地視察 ●石巻市立開北小学校:ベルマークによる寄贈品「大時計」贈呈式(小学校の卒業式後に開催) ●スパリゾートハワイアンズ:ダンシングチームへのインタビューと交流、募金贈呈 ④ スパリゾートハワイアンズ
第2回	2014年 4月18日～20日	宮城県・福島県	2回目の宮城県石巻市、福島県いわき市訪問 ●被災地視察、浜風商店街での交流 ●石巻市立鹿妻小学校:寄贈品「掲示板」確認 ●スパリゾートハワイアンズ:ダンシングチームとの交流、募金贈呈 ④ スパリゾートハワイアンズ
第3回	2015年 4月19日～20日	福島県	3回目の福島県いわき市訪問 ●被災地視察、浜風商店街での交流 ●いわき夏井ファーム:ボランティア活動(オーガニックコットンの苗植え) ●いわき市立藤原小学校:寄贈品「ワイヤレスアンプ」確認、ランニング教室、ボランティア活動(窓ふき) ●スパリゾートハワイアンズ:ダンシングチームとの交流、募金贈呈 ④ スパリゾートハワイアンズ
第4回	2016年 4月23日～25日	福島県	4回目の福島県いわき市訪問 ●被災地視察、浜風商店街での交流 ●いわき市立長倉小学校:寄贈品「逆上がり補助機」確認、ランニング教室、ボランティア活動(草取り、窓ふき) ●老人ホームふるさとの楽園:福島県立好間高校のフラスカーの皆さんと慰問活動 ●スパリゾートハワイアンズ:ダンシングチームとの交流、募金贈呈 ④ 古瀬屋、スパリゾートハワイアンズ
第5回	2017年 4月9日～10日	福島県	5回目の福島県いわき市訪問 ●被災地視察 ●いわき市立湯本第一小学校:寄贈品「草刈り機」確認、ボランティア活動(中庭の清掃) ●スパリゾートハワイアンズ:ダンシングチームとの交流、募金贈呈 ④ スパリゾートハワイアンズ
第6回	2017年 7月7日～9日	岩手県	初の岩手県訪問▶上閉伊郡大槌町、釜石市訪問 ●被災地視察 ●大槌町立大槌学園:寄贈品「プリンター等」確認、ランニング教室、ボランティア活動(苗植え、清掃) ●安渡公民館:NPO法人つどい主催の交流イベント運営協力(清掃、炊出し準備、会場設営・片付け)、交流会参加、フラガールによるステージ披露 ④ 小川旅館、宝来館
第7回	2018年 6月23日～24日	福島県	6回目の福島県いわき市訪問 ●被災地視察(ふたば未来学園の学生によるガイド) ●浜風さらら:オーガニックコットン事業のワークショップと意見交換 ●スパリゾートハワイアンズ:ダンシングチームとの交流、募金贈呈 ④ スパリゾートハワイアンズ
第8回	2019年 6月16日～17日	福島県	7回目の福島県いわき市訪問 ●被災地視察、東京電力廃炉資料館見学 ●双葉郡の畑:ボランティア活動(土づくり、草取り、看板作成、水やり等) ●スパリゾートハワイアンズ:ダンシングチームとの交流、募金贈呈 ④ スパリゾートハワイアンズ



## 貴重な体験を、明日への戒めとして



### 部品供給を続けるためのリスクヘッジ

震災で工場が被災することで、部品の供給に多大な影響を与え、自動車の製造をストップさせてしまう恐れがある。製品を供給し続けるという部品メーカーとしての責任を果たすため、リスクマネジメントを強化。拠点や工場の耐震補強や設備の固定などに着手。また、情報が遮断されないように、通信関係のバックアップも整えた。さらに、部品調達先の立地によるリスクを考慮し、生産の複社化などを検討した。

### 人間ならではの強さを生かす

震災後すぐに再起を図ろうと前向きに行動する経営者の姿を目の当たりにし、「強えな、人間って、捨てたもんじゃないな」と感じた。知恵を絞って何かをするというのは人間しかできないこと。逆に、それをできるのが人間。今回のコロナ禍でも、そのような人間の知恵が生かされるはずだと思っている。



### 災害対策マニュアルをより具体的に

震災は、突発的なことの連続である。パニック状態になっても適切な対処ができるよう、これまで制定されていた災害対策マニュアルを全面刷新した。震災後、1時間後、2時間後に誰が何をするかというところまで細かく決めることに。さらに、防災備品も見直し、水や食料のほかに、タオルやオムツ、生理用品、携帯トイレなども追加した。

### 災害時の行政との連携体制を構築

有事の際、行政が地域住民と支援者を繋ぐ役割をすることを再認識。デンソーグループが地域の方々に何ができるかを、事前に話し合っておく必要性を感じた。そこで、本社のある刈谷をはじめ、製作所のある行政と防災協定を締結。震災時などに、社屋や工場を避難所にして地域の方々を受け入れたり、備蓄している物品を配布したりする予定である。

### 震災を風化させず、今後の教訓に

現地の方々と長きに渡って関わるなかで、表面的に復興していたとしても、心の傷はずっと癒えることはないことを知った。もし、今後自分が災害が起これば、同じ体験をするだろう。だから、今回見たこと、聞いたこと、感じたことを風化させないことが大切だ。また、次に支援をすることがあれば、心に寄り添いながら行動に移したいと思った。



ひとりが差し出す100円が、大きな支援として被災地へ届く。給与天引で寄付をする基金

被災地支援のなかで、忘れてはならないのが、はあとふる基金。社員有志の給与天引による寄付で積み立てられた、「社員みんなの基金」だ。毎月1口100円、最大99口9,900円まで申請することができ、申請した金額が給与から天引きされ、自動的に基金に積立される。集めた寄付金は、自然災害の被災地や基金会員による災害ボランティア活動への助成など、地域社会への貢献に使われる。

震災被害の大きかった福島県、宮城県、岩手県の被災遺児・孤児への生活、就学支援を行うほか、被災地にあるNPO団体等へ助成することになった。

### 地道な声かけで会員数を増やす

当時、はあとふる基金に加入していたのは約5,000人。東北に継続支援をしていくのに十分な寄付金を集めるためには、会員を増やすことが必要不可欠だ。まずは、はあとふる基金自体の存在意義を再認識してもらい、今回の被災地支援の計画を知ってもらう必要があると考えた。そこで、総務部社会貢献推進室のメンバーを中心に、社内への啓蒙活動を始めたのだ。新入社員研修はもちろん、社員の集まる職場懇談会や社内イベントに出向いてお願いすることも。メンバーそれぞれが知恵を出し合い、草の根運動的に呼びかけていった結果、会員数は約8,000人にまで伸びた。

### はあとふる基金が結んだ絆

被災地で活動するさまざまな支援団体との出会いもあった。そして、お金だけではなくモノの支援も盛んに行われた。宮城県のNPO法人冒険あそび場にはアーティストのロコ・サトシさんが描いたカラフルな車両を、福島県の南相馬市民病院には聴診器等を、宮城県の消防署には救命胴衣を寄贈した。支援を継続することにより、年々助成額や助成先を増やし、これまで計約1.5億円が被災地へと寄付された。10年を迎え、東日本への支援も区切りを迎えるが、はあとふる基金としての社会貢献は日本各地で続いていく。

### 「当時」を振り返る



総務部  
社会貢献推進室長  
吉田 忠久さん  
(当時)

### 「支援の輪を広げるために」

継続支援のため、社会貢献推進室のメンバーがとてども尽力して会員を増やしてくれたことに感謝しています。また、支援先にはできるだけ足を運びました。印象に残っているのは福島県のみなさまです。地元に残って明るく働いている南相馬病院の看護師さんや、一度は県外に引っ越したものの故郷でがんばろうと戻ってきたNPO法人浮舟の里の方々の前向きな姿勢に感銘を受けました。

食べるだけで支援ができるハートフルメニューを社員食堂に。

デンソー内の全食堂で提供されている指定のメニューを注文すると、1食ごとに10円がはあとふる基金に積み立てられ、東日本大震災被災支援に活用される取り組み。2011年12月より始まった。また、通常メニューに加え、毎年「若手フェア」「福島フェア」として、特産物や食材を使ったメニューを考案して特別販売を行った。若手フェアでは、岩手県の世界遺産平泉のPRキャラクター「ケロ平」が来社。社員に若手観光を宣伝した。





《 震災が繋いでくれたご縁 》

# 絆マップ

被災者とデンソー社員の出会いが、  
人と人との関係に育ってゆく。  
震災は、喪失だけじゃない。

## 「冷凍コンテナがご縁を繋いでくれました」

震災によって、本社工場や店舗など、当社のほぼすべての設備が全壊流出となってしまいました。そのような状況の中リスタートした当社にとって、デンソーさんから貸与いただいた冷凍コンテナは大変ありがたいもので、材料や製品の保管に冷凍保管庫は必要不可欠なものとなっています。移設可能なコンテナ型だったので、仮設工場から現在の本設工場にも、容易に移すことができた点もプラスになりました。震災から10年になろうとしている現在も、その冷凍コンテナは元気に稼働中です。

また、今でもハートフルまつりに参加させてもらうなど、デンソーさんとのご縁が続いていることも、本当にありがたく思っています。今後も何らかの形でこのご縁が続いていきますように。



齊吉商店  
常務取締役  
齊藤吉太郎さん

## 「自立への一步を、後押ししてくださいました」

原発事故により福島第一原発から20km圏内にある南相馬市の小高地区で、避難指示解除を機に戻ってきた人々が集まって、明治時代に盛んだった養蚕をし絹織物の商品を作ることに。原発という最先端の技術にやられた町だからこそ、あえて原点復帰で全てを手作業で行うことにこだわりました。ちょうどその頃、デンソーさんに出会い、この活動に共感していただいた寄付金で、このプロジェクトの通帳を作りました。まさに、最初の一步を踏み出すきっかけとなり、感謝しています。

震災から10年経ってみて感じるのは、みなさまのおかげで支援をさせていただく私たちも変わったということ。私たちは、自立の道を歩んでいます。これからも、この活動を応援していただけると嬉しいです。



NPO法人 浮舟の里  
理事長  
久米静香さん

## 「手ぬぐいに込めた想いを体現してくれる存在です」

在来種の種を用いて有機栽培で育てた原綿を使って作る手ぬぐい「ふくしま潮目」は、原発により環境に大きなダメージを被った福島ならではの、未来に向けたメッセージ発信の一つだと思っています。そのような想いのこもった「ふくしま潮目」を、遠く離れた愛知のデンソーグループフラガールのみなさんに「応援すべきもの」「売るべきもの」だと思っていただけて、とてもありがたいことです。

さらに、販売の支援をしてくださることにすごい力を感じていますし、私たちの仲間だと信じています。震災というものがなかったことにされてしまわないように、私たちが直接お伝えできない部分をデンソーグループフラガールのみなさんの口から、伝えていただけたら嬉しいです。



いわきおてんとSUN企業組合  
NPO法人 ザ・ピープル  
吉田恵美子さん

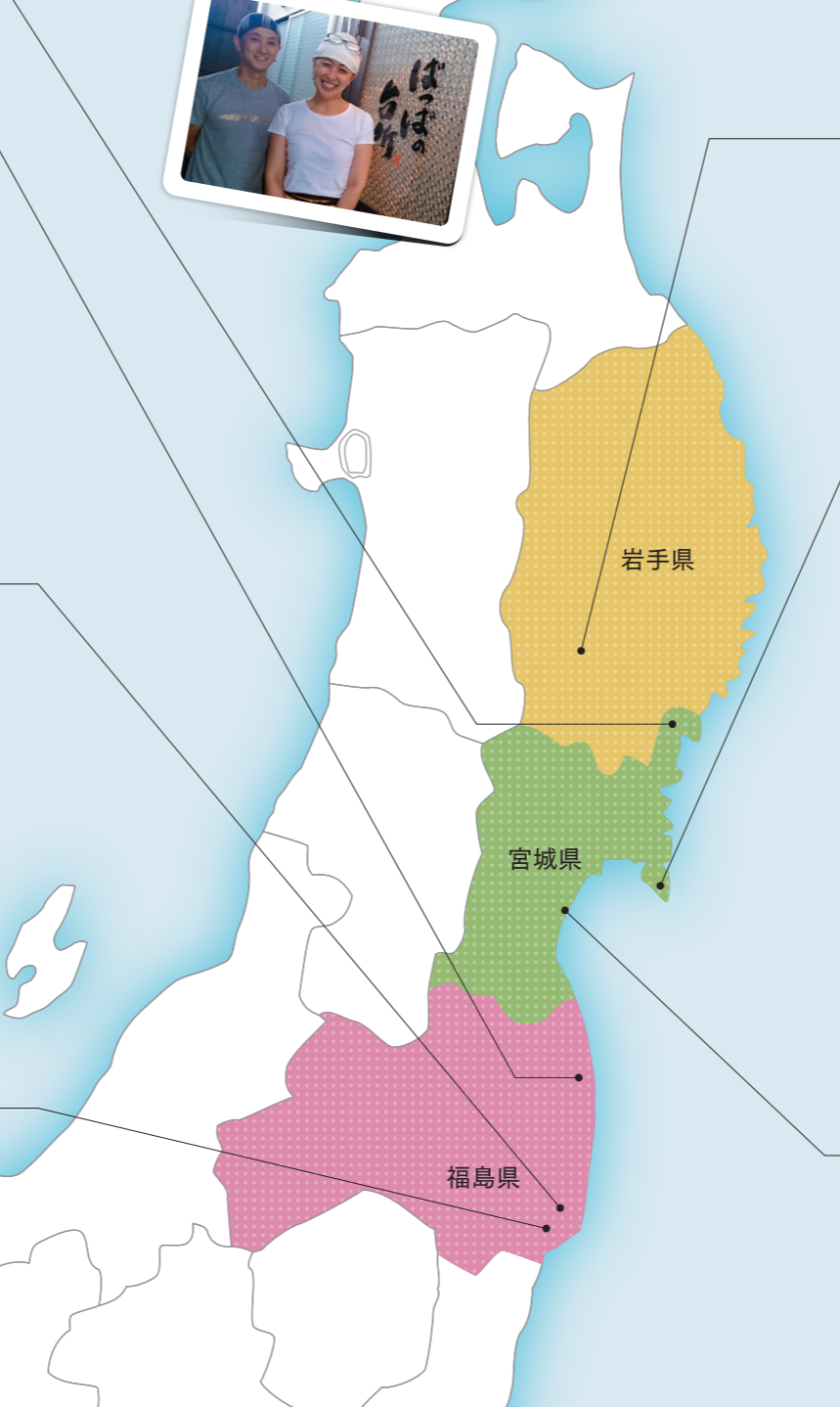
## 「継続した支援に、勇気付けられています」

震災後のキャラバン活動などを機に私たちに興味を持っていただき、フラダンスに挑戦してもらえて、すごく嬉しかったです。愛知という遠い場所からの応援に、「自分たちは一人じゃないんだ」と、とても勇気づけられました。震災から月日が経った今でも、こうして企業として毎年足を運んでいただけるのは、素晴らしいご縁だと感じています。

また、デンソーグループフラガールのみなさんと顔を合わせて思い出話をすると、自分たちもどどん前に進んでいるという実感もわきますし、新しい発見もあり、すごくありがたいです。自分たちが震災を経験してわかったこと、「諦めずに、前を見て、協力し合っていけば、元気になれる」ということを伝えていきたいです。



スパリゾートハワイアンズ  
元ダンシングチームリーダー  
猪狩(大森)梨江さん



## 「息の長い復興支援に、感謝しています」

デンソー岩手様の立地がご縁で、2014年からデンソーグループの社食で「岩手フェア」を開催していただいたり、社員研修や復興支援ツアーなどで岩手県へ足を運んでいただいたりと、復興を目指す本県を応援していただき、ありがとうございました。私自身も2014年、2015年の岩手フェアの際に、本社のセントラルパーク前でPR活動をいたしました。秋刀魚のつみれ汁を社員のみなさまに振舞ったことが、ついこの間のことのように感じます。デンソーグループのみなさまの息の長い復興支援の取組みに対し、あらためて感謝申し上げます。

これからも岩手県から感謝と元気を発信しつつ、地域の未来を共に創っていきたく考えておりますので、引き続きよろしくごお願い致します。



岩手県名古屋事務所  
主任主査  
横澤嘉宗さん

## 「この出会いは、私の財産です」

震災の次の年から、30人を超える人たちに来てもらい、ホヤの仕分けなどを手伝っていただいています。最初は初めてのことで戸惑いもあったと思いますが、「限られた時間で自分たちは何ができるか」を考えて、少しでも作業をマスターしようと真剣に取り組む姿が印象的でした。

毎年来てくれるうちに作業にも慣れて、今では何も教えなくてもいいくらいで、すごく助かっています。何よりも、毎年デンソーのみなさんに会えるのが楽しみなんです。そして、みなさんにも「来てよかった」と言ってもらえることが、私の幸せです。津波でいろいろな命を持っていかれて悔しいですが、それによってこうして出会えたのは財産だと思っています。



牡鹿半島 ホヤ漁師  
三浦政浩さん

## 「寄り添い型の支援に、勇気づけられています」

もともと、私たちの施設は若林区荒浜という地区にありましたが、津波で全部消失してしまい、今は災害危険区域に指定されて人が住めない場所になってしまいました。デンソーさんとのご縁は、寄付をしていただいたことから始まりました。今でも、就労継続支援として当施設で作っている手芸品を、ハートフルまつりで販売させてもらったり、ハートフルポイントの交換商品にいただいたりと交流が続いています。

こうして気にかけてもらえるだけで、もう少しがんばってみようかなと思えるもの。企業としてのデンソーさん、そして一人ひとりの社員様から、寄り添い型の支援をいただいていると常々感じています。あとは、感謝の気持ちを何かしらの形で、お返しすることが、私の最終目標です。

※2019年5月1日、「みどり工房若林」は太白区長町へ移転し、「みどり工房長町」へ名称変更しました。



NPO法人みどり会  
みどり工房若林  
施設長(当時)  
今野真理子さん



## 東日本大震災を振り返って

その時は自室で打合せをしていた。珍しく長く揺れたため、地震は大きいかもしれないくらいに感じたのが第一印象であったが、その後テレビに映し出された大津波の惨状に愕然としたことを覚えている。

「災害は突然にやって来る」ものとは頭で分かっているが、現実には起きると何から手を付けたら良いかは直ぐには判断できないものだ。しかし、未曾有の大災害時にもデンソーという社会的公器でもある大組織は冷静に正しく行動することが求められる。

まずは情報収集に努めて的確に状況を把握することだが、幸いにもデンソーは全国に支店や営業所のネットワークがあるお陰で刻々と情報が入って来た。次はどう行動するのだが、優先することを決めておかないと社員の行動に迷いが出たり、時にエゴイスタックになってしまう。早い段階で、一に人の命と安全、二に地域の復旧、三に生産の再開、と決めて全社に通知できたのは良かった。

大勢の社員が自主的なボランティアに参加し、現地の支援活動や清掃活動をしてくれたり、救援物資などを届けたりで、会社の意図以上に実行に移してくれた社員に私は誇りを感じた。

また、何と言っても被災地の社員や家族が無事だったことにも大きな安堵をした。そして、生産の再開に向けた社員の努力も並々ならぬものがあった。お客様にはご迷惑をお掛けしたとは思いますが、最善・最短の再開が出来たと信じている。これも社員に感謝、感謝である。

東日本大震災は大変な災害であったが、一方で私たちが被災地の方々と絆を深めるきっかけにもなった。デンソー福島は被災者の受け入れ、宮城でのボランティア活動、岩手での新工場の立ち上げなどを通じて各県の方々と交流する機会が増え、お互いに強い信頼関係を築くことが出来たのは有難いことだった。一例を上げれば、駅伝やバレーボールの試合では今も現地の大勢の方々がデンソーの応援に駆けつけてくださり選手を勇気づけてくれている。感謝を超えて感動する場面に接することも度々である。

嘗て経験したことのない大災害に遭遇し、改めて  
災害の「現実を超えて」

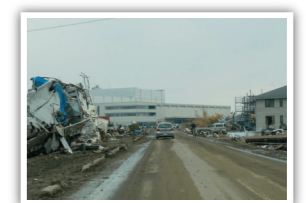
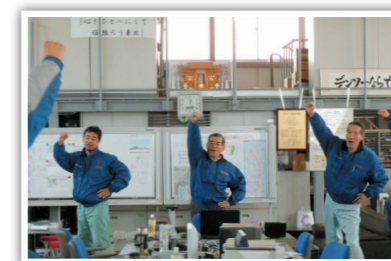
我々に求められることは「非常時にも冷静に行動」

判断は何時でも「人の命と安全が第一」

そして「支援は人の為ならず」地域の方々と絆を深めよう、と申し上げたい。

最後にこの期間を通じて私が気付かされた最大の御宝は、デンソー社員の「デンソースピリット」と「全社一丸」だった。これからはデンソーのレガシーとして後輩に繋げて行って欲しい。

加藤 宣明



### 編集後記

未曾有の災害をもたらした東日本大震災から10年。  
当時の出来事を振り返り、東北の今を想う機会となればとの思いで、デンソーグループ東日本大震災復興支援10年史を発刊する運びとなりました。

本誌を作成するにあたり、当時最前線で復興支援活動に取り組まれた方々を中心に、多くの関係者の皆さまに取材をさせていただきました。  
その中で、特に印象に残っているのは、そのほとんどの方が口にされた「感謝」という言葉です。それは、誰もが支援という意識ではなく、「東日本復興」という一つの目標に向かって、それぞれの立場で仲間や家族に感謝しながら、奔走する姿を容易に想像することができました。そして、そこには我々も知り得なかった世界が広がっていました。

震災から10年が経過しますが、復興は今なお道半ば。  
今後もデンソーグループとして、社員一人ひとりが繋がったご縁を大切に、引き続き寄り添いながら新たな10年を一緒に歩んでいきたいと思っております。

最後に、本誌の編集にあたり、お忙しい中取材にご対応いただきました皆様方、ならびに原稿をお寄せいただきました皆様方に心より感謝申し上げます。

株式会社デンソー 総務部

株式会社デンソー 総務部 ソーシャルリレーション室 社会貢献推進課

愛知県刈谷市昭和町1-1 電話:0566-61-4527  
WEB:<https://www.denso.com/jp/ja/csr/social/>

発行:2021年2月